

厚木市史たより

第23号

令和2年10月15日

題字は渡辺華山筆「游相日記」から文字を抽出して作成したため、清音の「たより」としました。

厚木と渡辺華山『游相日記』

厚木市史編集専門委員会委員 川島敏郎

はじめに

渡辺華山は江戸時代後期の三河国（現愛知県）田原藩家老・蘭学者・文人画家として、天保八年（一八三七）の米船モリソン号事件で幕府の外交姿勢を痛烈に批判して天保十年（一八三九）蚕社の獄で処罰を受け、その後、自ら刃切った人物として知られる。

しかし、この華山が相模国（現神奈川県）に關係した二冊の旅日記を書き遺していることはあまり知られていない。一度目は文政四年（一八二二）に藩主（十二代三宅康和）の弟橋三郎（のちに十三代康明）らと鎌倉（現鎌倉市）・江ノ島（現藤沢市）に遊んで『使相録』を、今一度は天保二年（一八三一）に相州小園（現綾瀬市）・厚木（現厚木市）に旅して『游相日記』を著している。小稿では、後者の旅日記をもとに、華山の人物像、当時の旅の有様、厚木の交通・産業・水害・商取引等について紹介することしよう。

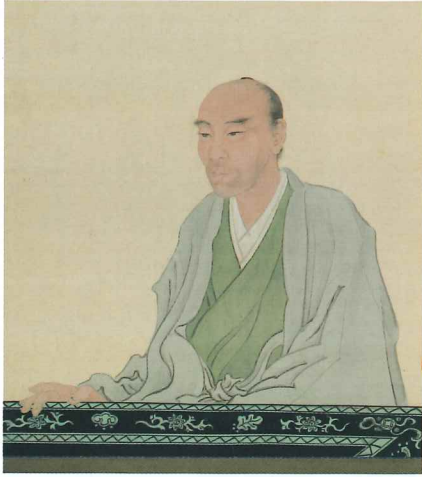


図1 椿椿山が描いた渡辺華山像（重要文化財 愛知県田原市博物館蔵）

1 華山の略年譜

華山は、寛政五年（一七九三）九月十六日、江戸麴町半蔵門外、田原藩三宅家上屋敷内の長屋で、父渡辺定通、母栄の長子として誕生した。生後間もなく根津新幡隨院の和尚に人相を觀てもらおうと、「必ずや世に名だたる人になるべければ大事に育つべし。しかし、後に災害に罹ることもあらんか」と占ったという。文化二年（一八〇五）、父の友人の紹介で藩儒鷹見星卓（昌平覺教授）の門下の眼が開かれたが、星卓亡きあとは当代一流の儒学者佐藤一齋（昌平覺教授）の門下生として学問に精勵し頭角を現した。

華山は学問の素養だけでなく、文人画家としての才能もほぼ同時に開花し始めた。星卓の斡旋で芝（現東京都港区）の画家白川芝山のもとに出入りしたが、生活苦に苛まれて断念した。そこで、父親の世話で金子金陵に入門して画才を認められ、さらに金陵の紹介で老中松平定信に仕えた当代一流の画家谷文晁に師事して写山楼への出入りも認められた。文化十三年（一八一六）頃の『書画家番付』によると、華山は江戸文人画家中の上位にランクインしている。以後、「一掃百態図」「佐藤一齋像」「鷹見泉石像」などの名作を次々と世に生み出した。

一方藩内でも、早くから藩主三宅康友（十一代）の信任が厚く、華山は世子元吉（康和）の御伽役を拝命した上、藩主から登という名を賜っている。また文化三年（一八〇六）には、後の藩内における後継者問題で華山らが推挙

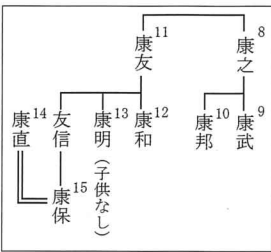


図2 三宅家略系図

した友信（幼名鋼藏）が、父康友、母お銀の方（康友の侍女）の子として生まれた。文化十二年（一八一五）、華山は刀番業務を命じられ、藩主の供頭として追従し、更に翌々年には、藩主の本丸・西之丸登城、諸侯廻勤にたびたび供奉し、徐々に藩内における地位も上昇した。

文政元年（一八一八）、華山は藩財政の窮乏を打開すべく、藩政改革の意見書を上申した。結果的にはこの上申書は却下されたが、同年華山は藩主康和に従って一時帰藩し、藩の内情を視察するに及んだ。このような藩財政逼迫下、藩領内では早魃による不作が発生し、更に藩主康和の逝去、その後嗣の康明の逝去の不幸が相次ぎ、藩は未曾有の存亡の危機に見舞われた。

こうした緊迫した情勢下、後継者問題も急浮上し藩論は二つに割れた。一派は有力大藩より後嗣を迎え重臣を中心に藩財政の再建を企む現実派、今一派は三宅家の血筋を絶つことなく先藩主康明の令弟友信を強力に推挙する華山を中心とした正統派であった。結果は現実派の見解が採択され、文政十年（一八二七）、播州姫路侯酒井雅楽頭忠実の六男福若（実宣）を迎え襲封し、三宅康直と名乗らせ、第十四代の藩主とすることで一件落着した。藩主に就任した康直は賢主で、華山の才覚に着目して側用人として採用し、友信を江戸巢鴨の別邸に住まわせ、「巢鴨老公」として厚遇した上、華山に対して老公附きを命じた。

2 華山の游相の動機

『渡辺家略年譜』によると、文政十二年（一八二九）八月十四日、藩主康直は、初め

ての政務として三宅家々譜の撰定を立案し、華山にその職務を内命した。これを拜命して華山は、御家譜大成腹稿目録と解題を上申した。その内容は、家譜、内室譜、公子譜、公女譜、側室譜、系図、氏族譜、家式、家格、家令、家律、式格諸礼図、諸臣系譜等九十余巻にのぼる遠大な計画であった。藩内の後嗣問題で現実派に敗北はしたものの、三宅家血統の正統性を力説して止まらなかった華山にとって、今度の藩主による藩譜作成事業は、正に彼の意を得たものであった。こうして彼は、藩の公認のもとに、自由な立場から家譜取調旅行に取り組む機会に恵まれた。

そこで先ず彼は、三宅家初代康貞の遺蹟を探访するため武蔵国瀧羅郡尻尻(現埼玉県熊谷市三ヶ尻)に至り、『訪舘録』二巻を著した。ついで第二の訪問地として、相模国厚木の地を選んだ。この小旅行の背景には、彼が後嗣問題の際、推挙して止まなかった「菓鴨老公」友信の実母、お銀の方の消息を尋ねることが大目的の一つとして存在した。そのお銀の方は、相模国高座郡早川村(現綾瀬市早川)の百姓、幾右衛門の娘の出であった。康友の侍女として仕えている間に友信を出産したが、その後間もなく、母親の急死を契機に故郷に戻り、全く音信不通となつてしまった。華山自身も、少年時代に彼女からかなりの恩恵を受け、「われ、童なりし時、いと憐みにあつかりたる者なり、いささかその恩に報いんかために、厚木までいたるを、道を迂して、ここ(早川・小園)までいたれり」と記しているほど、忘れがたい女性でもあった。

別離後二十五年以上が経過したが、華山は家譜編纂事業を絶好の機ととらえ、実母の姿すら記憶に止めずに成長した主君友信の意を汲んで、その母親の行方を明らかにし、自らは旧恩に報いることができた。後日、華山はお銀の方を菓鴨屋敷に招いて友信に面会させ、更に、友信の子伯太郎を

当藩主の息女お磯の方に迎えて後嗣とすることによつて、三宅家の正統な血筋を維持させることに成功した。これが十五代康保である。

3 「游相日記」の旅程

天保二年(一八三二)九月二十日、華山は弟子の高木梧庵(浦賀奉行渡辺甲斐守の用人、絵弟子一本平蔵の紹介で入門)を伴つて、江戸青山を出発し、一路厚木を目指して東海道の脇往還である矢倉沢往還(別名青山道又は大山道、現在の厚木街道)の歩を進めた。以下、日を追つて彼らの厚木までの旅程を示せば、次の如くである。

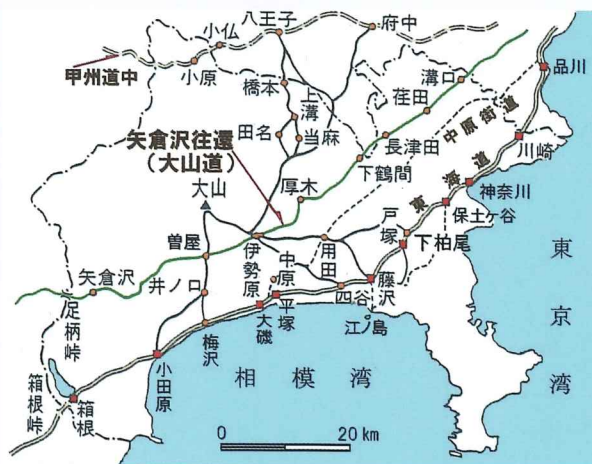


図3 近世の街道と矢倉沢往還(大山道)

- 二十日 青山・道玄坂・中・下渋谷・上・下目黒・用賀・瀬田・二子ノ渡(多摩川)・溝口・有馬・荏田(当地において升屋喜兵衛方に一泊、現横浜市青葉区)
- 二十一日 荏田・谷本・恩田・長津田・下鶴間(当地において角屋伊兵衛、俗にまんぢう屋に一泊、現大和市)
- 二十二日 下鶴間・瀬谷・大塚・柏ヶ谷・早川(当地においてお銀の在所である幾右衛門方を

訪問)。お銀は小園(現綾瀬市)の大川清蔵方に嫁したとの報に接し、大川方を訪問して、お銀、改めお町と再会を果たした。日記によれば、「たたなみたにむせひて、たかに問い答うる事もなくて時を移す」とあり、粗末な食事が出されても、「其人よろこひのあまり、何かたと工夫して、かくはもてなしけるなり」と箸をふれている。さらに、「むかしかたりに、時移りて、日西にかたふく」まで話し込む程であった。別れ際に華山は、路銀の一部をお町・父親・夫に分与した。この小園の条りは、人間華山の心情を吐露して余りあるものがあり、本日記中で最も傑出した部分と言えよう。その後、国分・海老名・河原口・厚木渡し(相模川)・厚木(当地において、万年屋平兵衛方に滞在)へと歩を進めた。

4 「游相日記」に見る厚木の風景

厚木に歩を踏み入れた華山らは、二泊三日にわたつて滞在した。その間、厚木在住の斎藤鐘助(利鐘、能書家・寺子屋師匠、伊勢原市上粕屋所在石造大山二ノ鳥居柱石の銘の揮毫者、唐沢蘭齋(医者)、内田屋佐吉(庄吉、提灯屋・長唄の名手)、目薬屋常藏(三味線の名手)、駿河屋彦八(酒井の俠客)などの文士・名士を招き入れ、酒肴の席を設けて、夜が明けるまで歓談酔狂した。厚木滞在



小園 清蔵	予醉 臥	梧庵	客舎酔舞図 萬年や亭主
蘭齋 娘			内田屋佐吉
唐沢 蘭齋	齋藤 鐘介	葉屋 常藏	

図4 客舎酔舞図(『游相日記』)

中に華山が書き残した旅日記は、当時の厚木の様相を様々な角度から生き生きと描き出しており、極めて貴重な資料を提供している。

① 厚木の隆盛と交通・商業

華山は厚木の第一印象として、その隆盛ぶりに目を見張り、家の造りは江戸とは変わっているが、男女の風俗はなら差異はないと述べている。その理由として、相模川を媒介とした河川交通の発達と、信仰の山、大山を背景に控えた陸上交通の要衝であることを挙げている。

前者の場合、厚木は相模川の東・西河口にある柳島（現茅ヶ崎市）と須賀（現平塚市）を中継地とした甲信地域と相武・房総地域の物産の集散地として賑わった。津久井・丹沢方面の山々から産出された薪炭・材木は、厚木の豪商が買い取り須賀へ出荷され、船載して江戸へ運ばれた。塩と干鰯（金肥で綿花栽培等に施肥）は、相模湾沿岸や房総半島から柳島・須賀を経由して厚木に到来して販売され、更には甲信の地にもたらされたりした。水運の便は、布・綿・金・鉄をはじめとして日用雑貨に至るまで、どれ一つとして欠けるものはないと記している。

一方後者の場合、矢倉沢往還（江戸青山・中略）・厚木・岡田・酒井・石田・伊勢原・松田惣領・矢倉沢・足柄峠、このうち、伊勢原より大山に向かう大山道あり）、八王子道（平塚・田村・岡田・厚木・上依知・当麻・八王子）、甲州道（平塚・田村・岡田

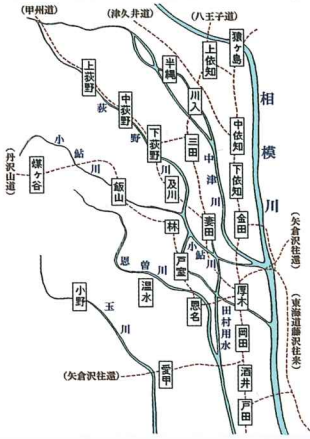


図5 近世における厚木交通図

・厚木・妻田・荻野・半原・津久井長竹・甲州）、津久井道（平塚・田村・岡田・厚木・中依知・三増峠・津久井長竹・甲州、俗に信玄道ともいう）、丹沢山道（厚木・恩名・戸室・林・飯山・煤ヶ谷・宮ヶ瀬）、東海道藤沢往來（河原口・藤沢・片瀬）の諸道が厚木で集約され、信仰・商取引の旅客で大いに賑わいをみせた。

河川・陸上交通による厚木の繁栄を物語るエピソードとして、華山は、当時厚木一帯を支配していた下野国（現栃木県）烏山藩が、藩財政補充のため、厚木村の豪商十五人に二千両という途方もない御用金の調達を命じたのに対し、一挙にその目標額を達成したことを一例として挙げている。当時の代表的な厚木の豪商としては、溝呂木孫右衛門（呉服商、屋号は^丸、厚木の渡船権を独占し、渡船の半分を獲得）、高部源兵衛（呉服商、屋号は^太、中野新兵衛（米穀商、屋号は^口）、内田屋庄吉（提灯屋、屋号は^久）、目薬屋常藏（薬商）、溝呂木宗兵衛（金物屋、屋号は^丸）等がいた。

② 相模川の水害

相模川の水利による厚木の隆盛の一方で、相模川を中心とした中小河川の氾濫による洪水の被害も甚大なものがあつた。天明年間（一七八一〜一七八八）年、連日の大雨による大洪水が発生し、田島・人家の流出は数知れないほどであつた。文政の初め（一八二〇年代）、烏山藩はようやく治水事業に着手し、膨大な工事費用を投入して一年の歳月を要して、十里からなる新堤を完成した。ところが、翌年の大雨による出水で、脆くも新堤は決壊し、地域住人の新堤に対する安心感も災いして、先の被害をはるかに超える多数の溺死者と田島・人家の喪失を招いた。この結果、住人間ににわかに藩政批判が沸騰した。華山は、今度の水害に関して、医者唐沢蘭齋の手厳しい治水政策批判を紹介している。その要点を示せば、以下の如くである。

役吏が派遣され治水工事が開始されると、彼等は住人から食財を食ったあげく酷使した。新堤は完成したものの決して堅固とは言えず、ただ人夫を沢山かき集めて土石を運び積み上げるだけで、河を浚うことは一切しなかつた。この結果、ついに大災害につながつた。堤が決壊した後の補修工事の話はほとんど聞かない。治水土木工事では入札が行われ、工事費用の高低で、工事請負業者が決定された。公金約一千両といつても、実際に費やされる金は三百両に満たないという。請負業者は藩威を借りて村民を虐待し、その害は藩全体に及んだ。決壊後毎年、村民は一致団結して新堤を補修し、その堅固さたるや藩のそれと比べようもないほどである。もし公金を村長に下して新堤の築造を命じたならば、そのような大災害は決して発生しないし、その費用も半分で済ませることが可能であろう。

③ 烏山藩政

次に藩の行政面については、厚木は烏山藩大久保佐渡守忠保の別封に所屬し、その領域は東は相模川、西は恩名・戸室、南は岡田、北は金田・妻田が他領との堺をなしていた。その他、藩領に所屬した愛甲郡内の地名は、温木、林、上荻野、飯山、下川入（以上現厚木市）、半繩、角田、三増、半原（以上現愛川町）等があり、さらに相模国内では、棚（田名）、大島（以上現相模原市）、片瀬（現藤沢市）、腰越、山崎（以上現鎌倉市）等、総計村数三十六か村をかぞえ、石高総計は約一万石余に達した。これらの諸封を統轄するために、藩では、陸上・河川交通の要衝である厚木の牛頭天王社（現厚木神社）の傍らに陣屋を設置し、年に四交替制で藩



図6 俠客駿河屋彦八像
(「游相日記」)

より代官を派遣し諸事に対処した。藩の政策は苛酷を極め、米穀・干鯛の商家に対しては

御用金を賦課したため、人々は皆、怨怒の念を抱いていたという。これに關し、華山との酒宴に同席した俠客の駿河屋彦八は、藩政を激しく批判し、次のように語っている。彦八は、「今二万兩を無利息十年賦で厚木に貸したならば、郷土に貧者がなくなり、其富もはかり知れないほどである。しかし、今の殿様は、慈仁の心が少しもなく、隙をうかがっては収奪を繰り返してばかりいる。このような殿様は取り替えた方がよいと思う」と痛罵し、華山を愕然とさせた。

これに続けて医者唐沢蘭齋は、「厚木が御領(幕府直轄領)になれば上々、それがかなわなければ、旗本の知行地でもよし」と述べた後で、その理由に、「御領では下意上達が早く、何事も寛大公平である」ことを挙げていた。それに引き替え、「烏山藩のような弱小藩は、威勢も強く、穿鑿も行き届き、少しの隙さえあれば苛政を行い、用金を申しつけ、収奪を専らとする」と語気を強め、再び華山を愕然とさせた。小藩の要職を預かる華山としては、彼等の大胆とも思える批判的発言は、彼等の偽らざる心情の吐露であり、小旅行中最大の衝撃的な体験でもあったと考えられる。

④ 厚木六勝の揮毫

一夜明けた翌日の二十三日、華山は蘭齋・鐘助に誘われて、厚木六勝の見学に出かけた。彼等は厚木の渡し場辺りから南下して岡田方面に向かい、桐辺堤の辺りで歩を休めた。この堤は文政年間(一八一八〜二九年)に出来上がり、当時は長

閑な田園風景が展開する絶景の地であったが、現在この堤下にはコンクリート製の下水道管が埋設されている。



図7 桐辺堤跡(1980年頃)

華山はこの付近で、鐘助の提示した原案をもとにして写生を行い、翌朝、これに六枚の絵を揮毫した。その絵とはすなわち、「雨降ノ晴雪」(大山の雪景色)、「仮屋ノ喚渡」(渡し場の舟を喚ぶ風景)、「相河ノ清流」(相模川の清流)、「菅廟ノ驟雨」(天神の森に降り注ぐ雨の風景)、「熊林ノ曉鴉」(熊野神社の森で明け方啼く鳥)、「桐堤ノ賞月」(桐辺堤に沿って流れる用水に映える月)で、華山から鐘助に交友の記念として譲与された。その後一時所在不明とされていたが、ごく最近、アメリカのハーバード美術館が保管していることが明らかとなった。

かくして、二泊三日にわたる華山の自由奔放な厚木での滞在も終末に近づき、別れの時が迫ってきた。華山はこの時の状況を、「諸子に別れを告げ、去らんとす。皆袖を引きてかえさぬを、ふりきりていで行く」と表現している。華山らは数百メートル上流にある金田の渡しから相模川の対岸に渡り、河原口(現海老名市)から南下して東海道藤沢往來に出、藤沢宿で一泊した。翌日、清浄光寺(遊行寺・時宗)を参拝した後、浦賀(現横須賀市)に向かい、浦賀奉行渡辺甲斐守を訪問した。当地では、奉行の用人であり、華山の絵弟子でもある一木平蔵の案内で内海(江戸湾)の要塞を見学した上、江戸に帰還している。

おわりに

厚木から江戸に戻った華山の身边にはわかに風雲急を告げる。游相の最終地である浦賀への訪問の影響からか、この頃から華山は蘭学研究に急速に傾斜していく。藩内においては海防事務掛を拝命し、藩外においては高野長英らと親交し、天保四年(一八三三)には蘭学研究団体の「尚齒会」を立ち上げた。

時折しも、尚齒会の席上ではモリソン号事件の話題が沸騰し、長英は『戎戔夢物語』を著し、華山は『慎機論』・『駄舌或問』の草稿を著した。その結果、幕府から政事誹謗の罪科に問われ、華山は在所での永蟄居謹慎、長英は入牢を申し渡された。この事件を蛮社の獄という。華山は護送駕籠に乗せられて東海道を西に進む途上、藤沢宿西方の四ツ谷(大山への追分)で、差し込むような腹痛に苛まれながら、「是より右大山みち」と刻まれた大山道標を見事に描き切っている(「客坐掌記」に描写あり)。その後、門弟福田半香による華山生計救済のための江戸画会が問題視され、藩主に類禍が及ぶことを極力憂いた華山は、天保十二年(一八四一)十月十一日、幽居において自刃して果てた。享年四十九であった。長男立・椿椿山等五人に宛てた遺書には「不忠不孝 渡辺登」とある。游相後の華山の足跡を振り返ると、小園でのお銀の方との再会、厚木での自由奔放な歓談酔狂は、華山の生涯の中で最も充実した安寧な一時であったような気がしてならない。

厚木市史たより 第23号

令和2年10月15日発行

編集 厚木市教育委員会文化財保護課

発行 厚木市

住所 神奈川県厚木市中町三十一一七

電話 〇四六・二二五・二〇六〇

FAX 〇四六・二二三三・〇〇八六

「厚木市史たより」は厚木市ホームページにも掲載しております。